

情報社会の本当の怖さに気づく

一年三組 高野 光

便利さと怖さ、これがこれまでの私の情報社会観である。今回の授業を通して、この情報社会の捉え方が大きく揺さぶられたのでそれについて発表したい。私は、SNSやインターネットは確かに怖い面もあるが、私たちの生活を便利で豊かなものしてくれる、すぐれたツールだと捉えてきた。SNSではコミュニケーションの輪が広がり、またインターネットでは知りたい情報が手軽に得られる。

もちろんマイナス面も理解しているつもりだ。ネット上のいじめ、誹謗中傷、性的な画像の拡散など、時にはこれらが原因で命を絶つ人もいる。ネット上に書き込まれた内容や流出された画像は消去することがほとんど不可能だとも言われる。

しかし、このマイナス面の怖さは、SNSやインターネット利用者がルールを守り、自己防衛を適切に行えば、ある程度は避けることができるものである。つまり、私の情報社会観の「怖さ」は、言ってみれば、回避可能な「怖さ」であったのだ。

ところが、今回の授業で得た情報社会についての知見は、これまでの私の情報社会観を揺るがすものであった。インターネット社会の本当の怖さは回避することができて困難であるという次の主張である。

○現代はポスト真実の時代であり、人々は真実よりも自分の感情に寄り添う情報報、あるいは自分が共感できる情報を信じる「確証バイアス」の傾向にあり、SNSはこの傾向に拍車をかける。（国谷裕子「ポスト真実時代のジャーナリズム」）

○私たちは自己にとって都合のよいナラティブ形式によって世界を理解している。しかも、現代のSNS社会は、アルゴリズムで最適化されたナラティブによって私たちに固有のナラティブを書き換えようと挑んできており、ナラティブから完全に離脱して日常生活を送ることは難しい。（大治朋子「SNS

で暴れるナラティブ」)

両者ともにSNSやインターネットがもたらす情報に対する私たちの心的傾向、情報の恣意性や操作性を意識することの難しさを問題にしている。

では、どうすればよいのか。情報社会を生きるための課題は、総務省『令和5年版 情報通信白書』のアンケート結果に端的に表れている。

日本人の「複数の情報源を比較する」、SNS等で表示される情報が利用者自身に最適化（パーソナライズ）されていることを「知っている」、SNS等では自分に近い意見や考え方に対する情報が表示されやすいことを「知っている」等の割合は、米国、ドイツ、中国に比べてきわめて低い傾向にある。情報社会の本当の怖さは情報に対するこの無自覚さにある。

当たり前のことになるが、情報社会の本当の怖さに気づき、その情報が正しいのかどうかを複数の情報に当たって吟味すること、情報の恣意性、操作性への目配りを徹底すること、これが情報社会を生きる私たちの課題なのである。